

「学校・家庭・地域の連携による防災教育の推進」

平成 26 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 須崎市立新荘小学校

I 学校における背景、問題意識

須崎市立新荘小学校は、海拔 5.1m の場所に位置し、最後にニホンカワソウが発見されたとして有名な新荘川がすぐ近くを流れ、約 1 km 下流には太平洋を望むことができる。仮に震度 7 の地震が起きた場合には、新荘地区に 30 cm の津波が 31 分で到達すると予想されている。今後、高い確率で起こるだろうといわれている南海トラフ地震について、子どもたちが保護者や地域の方とともに防災学習を進めることは、喫緊の課題である。

そのため、平成 25 年度に防災教育チャレンジプラン（入門枠）及び子ども防災キャンプ、平成 26 年度には高知県実践的防災教育推進事業の指定を受け、継続的に学校・家庭・地域の連携による防災教育を推進することとした。

II 取組のポイント

- 防災教育を本校のキャリア教育の柱の 1 つとして位置付け、生きる力を育む防災教育を推進する。
- 新荘地区防災連絡協議会と連携し、学校・家庭・地域の連携による防災教育を推進する。

III 取組の概要

1 新荘小学校防災教育の目標

- ・災害時に自分で判断し、最善の行動がとれる児童を育成する。
- ・助け合いやボランティア精神など、「自助・共助」の心を育み、人間としての在り方、生き方を考える。

2 防災教育におけるめざす児童像

- ・災害時に、自分の命は自分で守れる児童
- ・災害発生時には、集団や地域の安全に役立つことができる児童
- ・防災についての基礎的・基本的事項を理解できる児童

3 取組内容

(1) 授業実践

6 月に 5 年生が学級活動で「命を守る方法を考えよう」の研究授業を行った。子どもたちは、一人である場合、地震・津波から自分の命を守る方法を話し合うことができた。

また、7 月には 6 年生が学級活動で「これが大切、非常持ち出し袋の中身」という題材で研究授業を行った。班で中身のリストを話し合い、最終的に自分の非常持ち出し袋の中身を決定した。その後、6 年生は、自分の非常持ち出し袋をいつでも持って避難できるように学校に置いている。

研究授業には学校安全対策課をはじめ講師の先生に来ていただき、ワークショップ型の校内研修会を行い、事後へ繋がる取組を行った。



【研究授業】



【ワークショップ型事後研修会】

1～4 年生は、参観日に防災に関する公開授業を学級活動で行った。

防災に関する授業では、全学年が「高知県安全教育プログラム」を積極的に活用し、実践に取り組んだ。

(2) 防災の視点を取り入れた学校行事

① 春の遠足

本校が行っている春の遠足では、5 年生が毎年全校で楽しめるゲームやクイズを考えレクリエーションをしている。今年度は、「防災に関するクイズ」を取り入れ、皆で考えた。



【防災クイズ】



【高保木トンネル上避難所巡り】

また、遠足の帰りには新しく整備された高保木トンネル上の避難所巡りを行った。

②修学旅行

6年生は、人と防災未来センターで阪神・淡路大震災の教訓を学んだ。



【津波浸水ハザードマップを使つての学習】

③着衣水泳・救命救急法講習会

須崎消防署と須崎警察署の方にご指導頂き、着衣水泳を実施した。着衣のまま泳いだり、ペットボトルを持って浮いたりする練習を行った。



【着衣水泳】



【救命救急法講習会】

午後からは日赤ボランティアリーダーの岡村眞男氏に講師をお願いして、救命救急講習会を実施し、心肺蘇生法やAEDについて学習した。

④運動会

運動会に防災種目を初めて取り入れた。「急いで逃げろ!」という縦割り班競技で、ヘルメットをかぶり急いで救命胴着(ライフジャケット)を脱着する競技である。



【防災種目「急いで逃げろ!」】

(3) 防災学習の取組

①防災ポスター

全校で防災ポスターに取り組んだ。完成した作品を高知県「南海トラフ地震に備えよう!」啓発ポスターコンクール(主催:高知県危機管理部南海トラフ地震対策課)に応募した。小学校低学年の部と高学年の部及び特別支援学級併せて12名の受賞者のうち、本校から最優秀賞受

賞を含む8名の児童が受賞した。

②防災新聞

6年生全員一人ひとりが、防災新聞を作製した。校内に掲示するとともに、公民館や新莊郵便局などにポスターを貼っていただいた。



③防災マップ

4年生は、総合的な学習の時間に防災マップを作製した。



【防災マップ作り】

④防災標語

全校で、防災標語に取り組んだ。

<各学年の金賞標語>

「すぐにかぶろう あたまをまもるヘルメット」(1年生)

「いつかくる じしんにそなえて さあれんしゅう」(2年生)

「すぐひなん つ波に負けずに まもる命」(3年生)

「防さいの輪 つなげて広げて 命をまもろう」(4年生)

「地震きた 頭を守る真っ先に ゆれおさまると にげるぞ高台に」

(5年生)

「備えれば 地震が来ても 大丈夫」

(6年生)

⑤新莊地区防災ハンドブック

昨年度、防災教育チャレンジプランの取組として、新莊地区全家庭に防災教育のしおりとして「新莊地区防災ハンドブック」を作製し、配布した。

今年度は、新入生の防災学習の授業で担任が内容を説明し、家庭で防災について親子で話し合った。

(4) 地域や防災関係機関等との連携

①避難訓練

今年度は、5月、6月、9月、12月の4回実施した。毎回、緊急地震速報と地震音の音源を使用して実施した。また、保護者や地域の方も参加して下さっている。

12月の避難訓練では、初めて2次避難所である「かわうその里見晴らし公園」に避難した。また、二年ぶりに保護者への引き渡し訓練も同時に実施した。

②校区の避難場所めぐり

5月に校区の避難場所をみんなで知るという目的で、教職員と保護者、地域の方とで14箇所の避難場所を訪れ、場所と整備状況を確認した。



避難所巡り

③昭和南海大地震の体験から学ぶ

4年生は、須崎地区自主防災連合会元会長の大家順助氏から昭和南海大地震の体験をお聞きした。

<内容の要旨>

今から68年前の昭和21年12月21日午前4時過ぎ、土佐沖を震源地とする南海大地震が発生した。当時、高等小学校2年(現・中2)だった大家順助さんは、その時、恐ろしい地鳴りと家が鳴くように軋む音、その後の激しい揺れに言葉に表せない恐怖を感じたそうである。揺れが収まってから須崎小学校へ急ぐと、グラウンドに大勢の人が集まって火を焚いて暖をとっていた。須崎駅の方で火事があり、見る見るうちに空が真っ赤になった。気になったけれど「津波が来る、行ったらいかん!」という声で、大家さんも皆について城山へ逃げたそうだ。逃げた山の方からも引き潮で津波が来たこと、津波にのま

れ泥まみれになった遺体を何体も見たこと、その後の生活のことなど、大地震を体験された大家さんのお話は胸に迫り、子どもたちも真剣な表情で聞いていた。



【昭和南海大地震の体験から学ぶ】

近い将来、必ず起こる南海トラフ地震では強い揺れと大きな津波が予想されている。津波は海底の泥を巻き上げて、岸の近くでも約250kmのスピードでせまってくるそうである。「角谷は山のふもとまで全部津波がくる。津波はこの川沿いを走る。」というお話からも、南海地震はすぐ身近なところにあることを感じた。

寝ている部屋に家具や重い物はないか、非常用持ち出し袋の用意はあるか、もしもの時はどこに逃げるか、今一度、家族で話し合っ確認しておくことが大事だということを改めて感じた時間となった。

④かわうそフェスティバル

新荘地区の夏祭り「かわうそフェスティバル」は、毎年7月に開催され、学校で決めた出し物を実施している。今年は全員参加の「防災クイズ」を行った。地域の方も防災について一緒に考える時間となった。しんじょう君やミョウガちゃんも来てくれて、会場が盛り上がった。

かわうそフェスティバルの様子



しんじょう君もミョウガちゃんも応援に来てくれました。

⑤新荘地区合同防災訓練

学校と新荘地区防災連絡協議会とが共催で、新荘地区合同防災訓練を実施した。

訓練内容は、「地震・津波避難訓練」、「避難生活体験」、「炊き出し訓練」、「引き渡し訓練」であった。当日は、防災参観日として日曜日に実施したので、ほぼ全家庭の保護者の皆様や地域の方が参加して下さった。

避難生活体験では、「簡易トイレづくり」「骨折の応急処置」「搬送」について、縦割り班の児童に保護者・地域の方も加わって訓練をした。



【地震・津波避難訓練】



【避難生活体験】



【炊き出し訓練】



【引き渡し訓練】

IV 成果と今後の取組

1 成果と課題

(1) 成果

○防災教育に関する意識の向上

日ごろの子どもたちの言動から、防災意識の向上を伺うことができる。休み時間に避難訓練をすると、すぐダンゴムシのポーズができる子どもたちの姿があったり、避難生活の学習後に言われなくても非常持ち出し袋の準備ができる姿があったり、地震や避難についての情報を朝の会で話したり、ということから意識の高まりを感じる。

○新荘地区に根ざした防災教育が継続

海拔 5.1mの所にある本校だからこそ、毎年、見直しをしつつ命を守る防災教育が重視して継続されている。

○地域との密な連携

学校の呼びかけにすぐに対応してくださる地域性や避難道の整備など、こ

こ3年で防災教育が進んだことに地域ぐるみの連携を感じる。

(2) 課題

○防災で学んだことの行動化

子どもも大人も防災意識は高まってきている。しかし、学校で防災学習をして知識としては入っているが、1人である時どう行動したらよいか分からない、もしもの時の連絡方法を話し合っていない等、行動化について課題が残る。

○小・中・高の連携

小・中・高とも近くにありながら連携があまりできていない。

今年度、6年生の作った防災新聞を掲示していただくよう中学校を訪問させていただいた。これを契機に連携を図ることができればと考える。

○家庭・地域における防災意識の温度差

成果に地域との連携を挙げたが、どうしても地区によって温度差があり、全ての家庭・地域の意識の向上を図ることが課題の1つである。

2 今後に向けて

○本年度、防災教育全体計画と各学年の年間指導計画の見直しを行ったので、事業終了後の次年度以降も、「高知県安全教育プログラム」をもとに、小学1年生から6年生まで計画的に学習し、質の高い防災教育を今後も継続することで、学習したことが行動化へと繋がるようにしていきたい。

○防災学習についての小・中・高の連携を進めていきたい。

○今後も、保護者・地域と連携した防災教育や避難訓練を実施することにより、防災意識の向上と行動化を図っていきたい。